

静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果  
－平成28年度－

平成30年3月3日  
白木 賢信（常葉大学）

I 調査結果の概要

1. 利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、「小学校」および「7～12歳」がそれぞれ最も比率の高いカテゴリである。これらをそれぞれ経年変化で見ると、「小学校」は、調査1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9年目以降は50%台に達している。一方、「7～12歳」は、4年目までは50%前後で推移し、5年目以降は60%を超えるようになっている。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながらも、8年目までは「1泊」が最も高い比率で、9年目以降は「2泊」が最も高くなっている。
2. 利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は10年間を通じて常に最も比率の高い項目で、4年目以降は60%以上の比率で推移している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。利用目標の達成度については、「だいたい期待通りできるようになった」が10年間を通じて70%以上の比率である。
3. 利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、10年間で13ポイント、「時間を守るようになった」および「仕事などを積極的にするようになった」の比率は、10年間で12ポイントそれぞれ上昇している。
4. 繰り返し利用することによって予想される変容について、調査が行われた9年間とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が上位3項目で変わらない。但し、2年目（調査初年度）と10年目の比率差については、「時間を守るようになる」と「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」はどちらも殆ど差が無いが、「周りの人に優しく接するようになる」は14ポイント高くなっている。

## Ⅱ 調査の概要

### 1. 目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示する。あわせて、平成19～28年度の10年間における経年変化の傾向も提示することにしたい。

### 2. 内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

- (1) 利用団体の種類
- (2) 利用団体の主たる年齢層
- (3) 利用宿泊数
- (4) 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
- (5) 利用目標の達成度
- (6) 利用後の参加者の変容
- (7) 繰り返し利用することによって予想される変容

### 3. 対象

平成28年度のセンター利用団体

### 4. 方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の通り。

- (1) センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
- (2) 各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

### 5. 調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率） 139（22%）      有効回収率 139（22%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成28年度における統計上のセンター利用団体数（642団体）を母数としている。

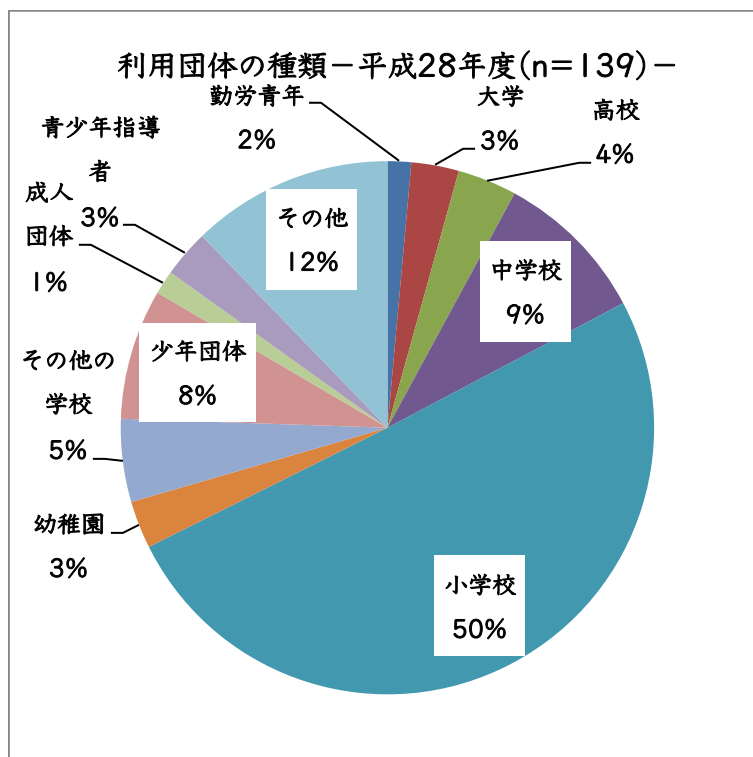
### 6. 実施期間

平成28年4月～平成29年3月

### Ⅲ 調査の結果

#### Ⅰ. 利用団体のプロフィール

最初に、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図1）、最も比率が高いのは「小学校」（50%）で、次いで「その他」（12%）、「中学校」（9%）、「少年団体」（8%）と続いている。なお、学校関係は74%で全体のほぼ3/4である。



#### 「その他」の内訳

保育所(3), 学童保育(2), 英会話学校, NPO法人, 看護学校, 教育委員会, 子育て中の母親, 子ども会, 社会教育施設, スポーツクラブ, 町内3小学校の希望者, 町内6年生の希望者, ファミリーキャンプ, ボーイスカウト

図1 利用団体の種類

この利用団体の種類の10年間の変化について示したものが図2である。これによると、「小学校」は、1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9年目以降は50%台に達している。「少年団体」は、8年目までは概ね20%前後で推移しているが、9年目は12%、10年目では8%まで低下している。「中学校」も同様の傾向で、1～7年目は10%台、8年目以降は10%未満で推移している。

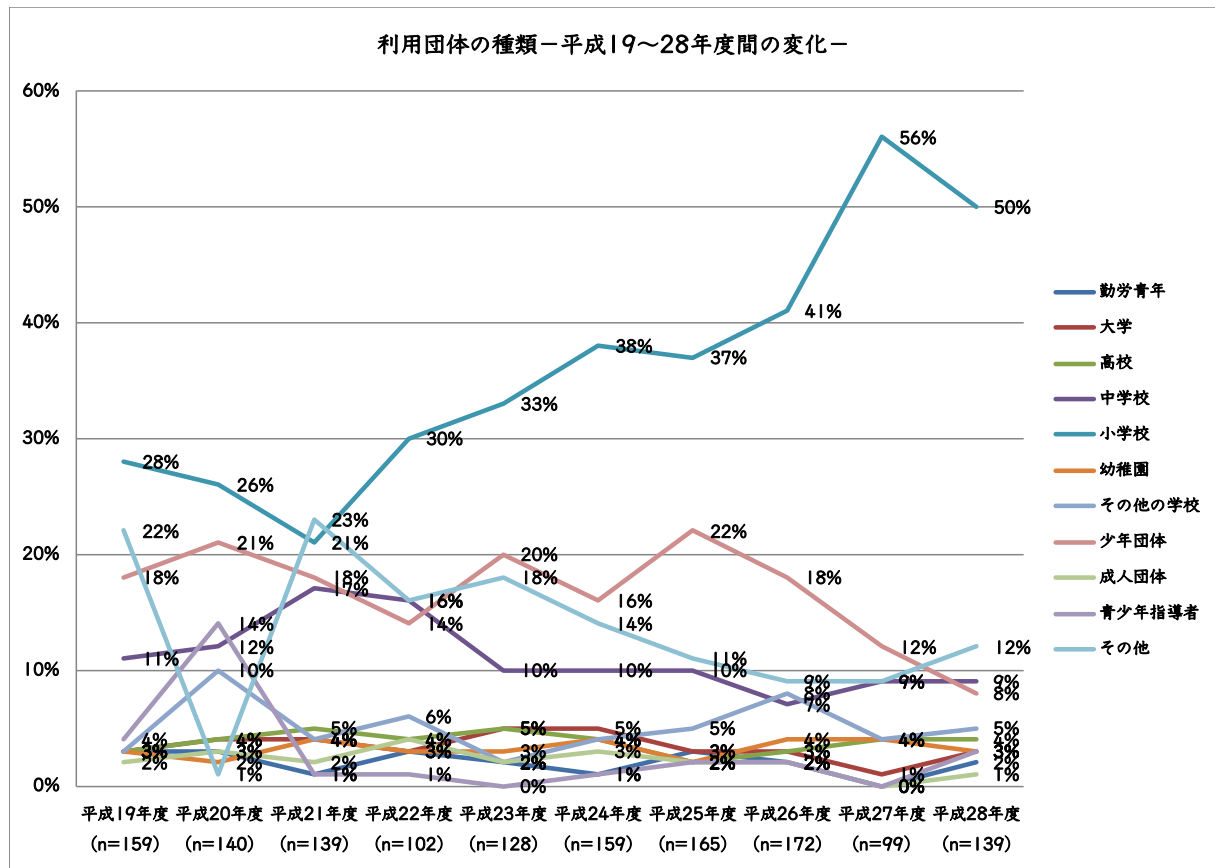


図2 利用団体の種類－平成19～28年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層については（図3）、最も比率の高い「7～12歳」（69%）は全体の2/3以上である。次いで高いのは「13～18歳」（16%）である。

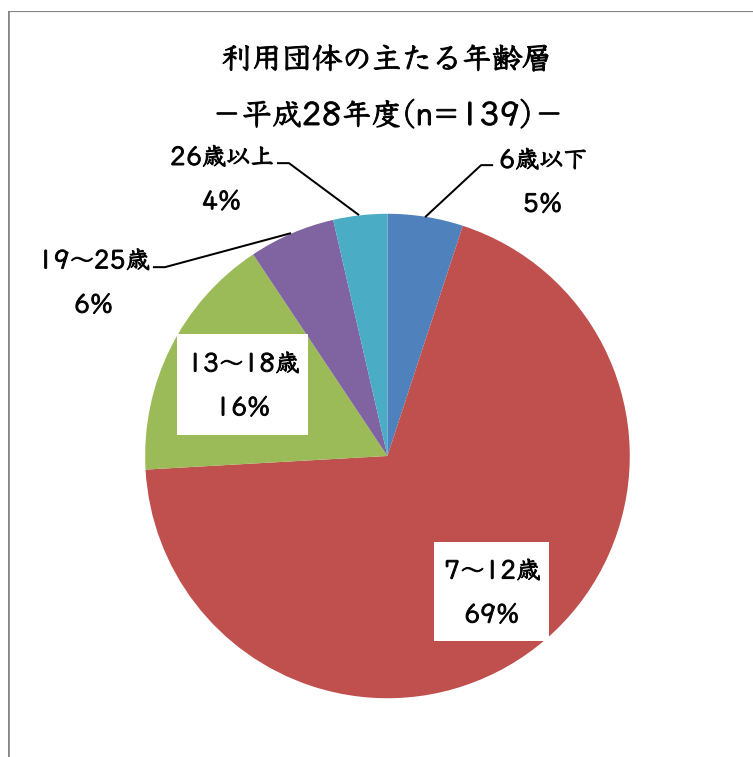


図3 利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を10年間の変化でみると（図4）、「7～12歳」は、4年目までは50%前後で推移し、5年目以降は60%を超えるようになっている。一方、「13～18歳」は、5年目までは20%台、6年目以降は10%台で推移している。なお、その他のカテゴリーは、概ね1ケタ台の比率で推移している。

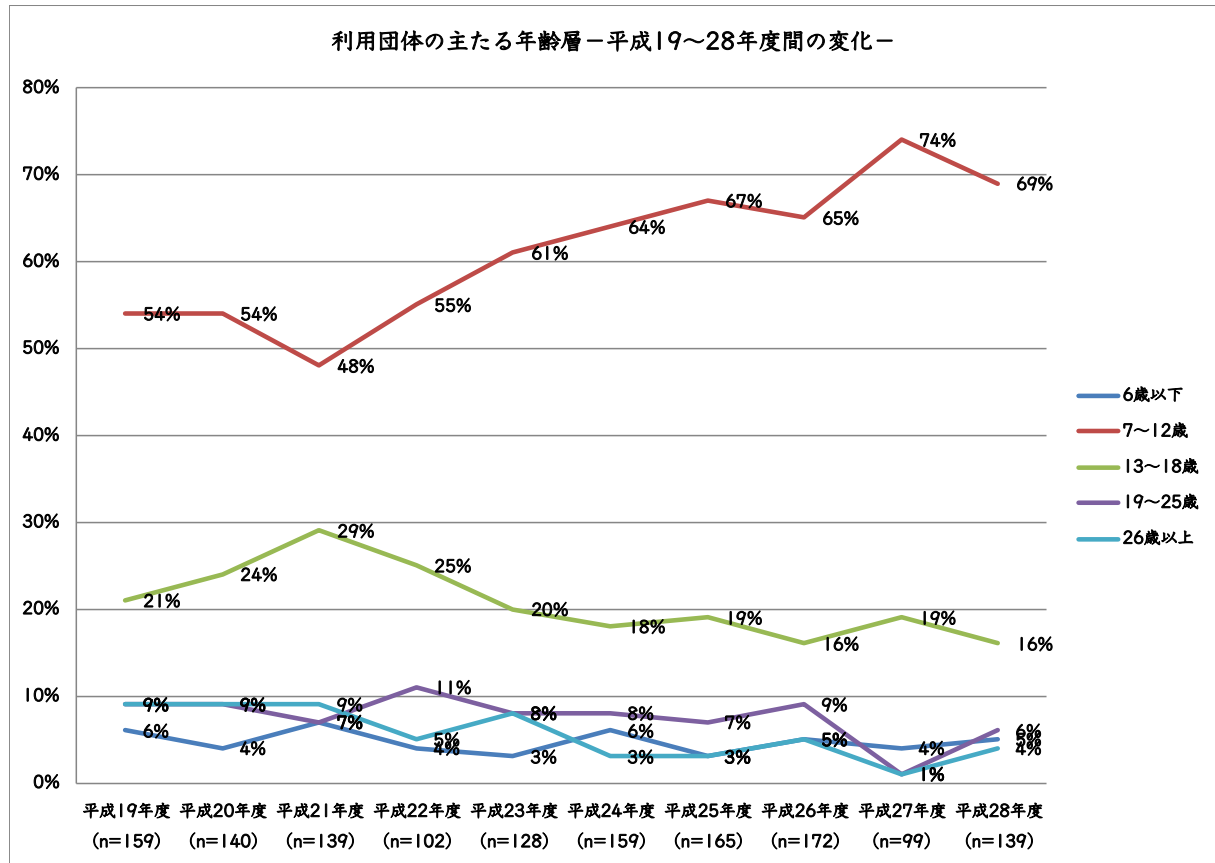


図4 利用団体の主たる年齢層－平成19～28年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5）、「2泊」（49％）と「1泊」（48％）がほぼ同じ比率である。なお、両者で全体の9割以上を占めている。

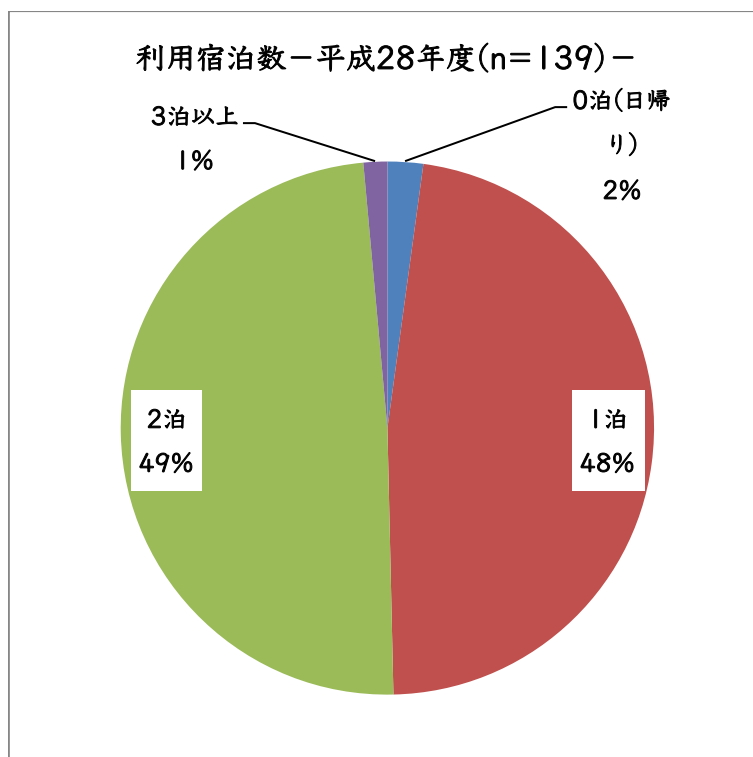


図5 利用宿泊数

この利用宿泊数を10年間の変化でみると（図6）、8年目までは「1泊」が最も高い比率で、9年目以降は「2泊」が最も高くなっている。

なお、「1泊」と「2泊」の全体における占有率は、2年目までは7割台、3～6年目は8割台、7年目以降は9割台で推移している。一方、「0泊（日帰り）」と「3泊以上」の占有率については、2年目までは2割を超えていたが、3～8年目は概ね1割台、9年目以降は5%未満で推移している。

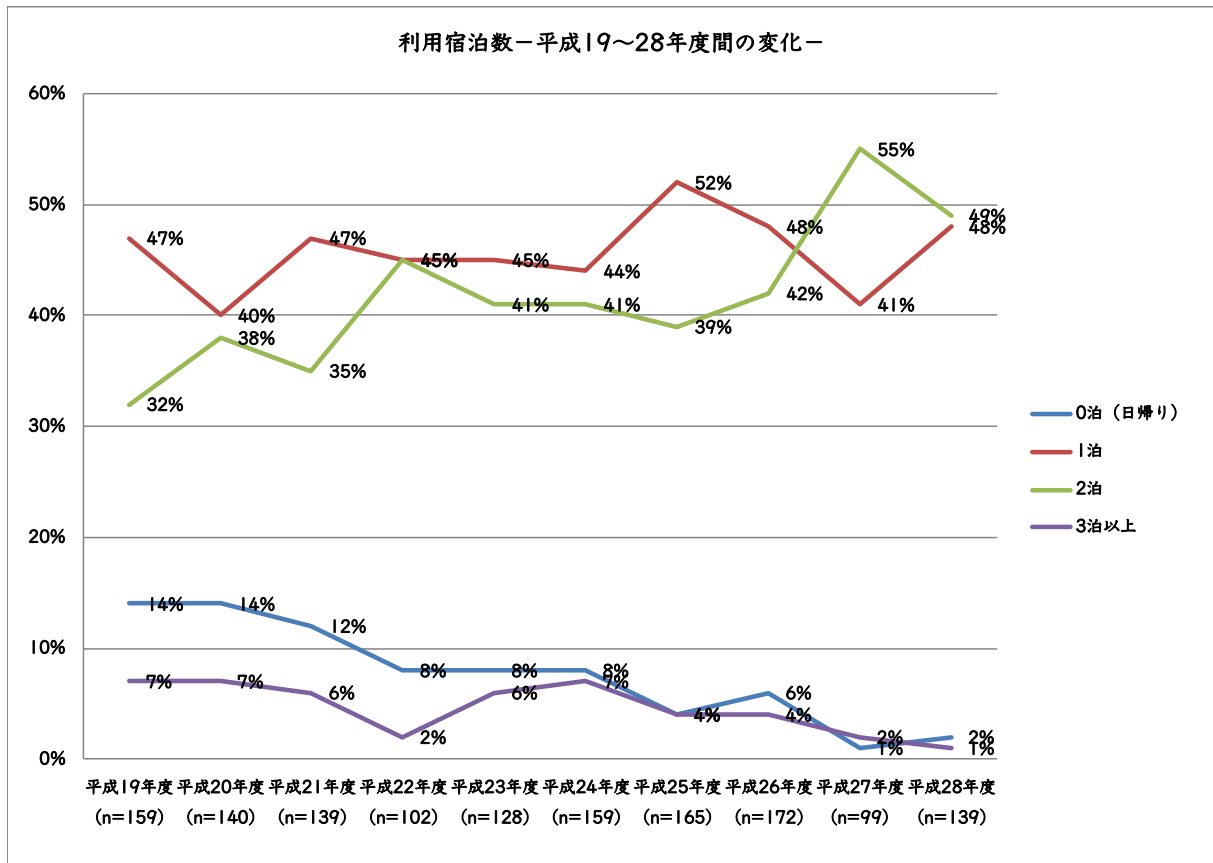


図6 利用宿泊数－平成19～28年度間の変化－

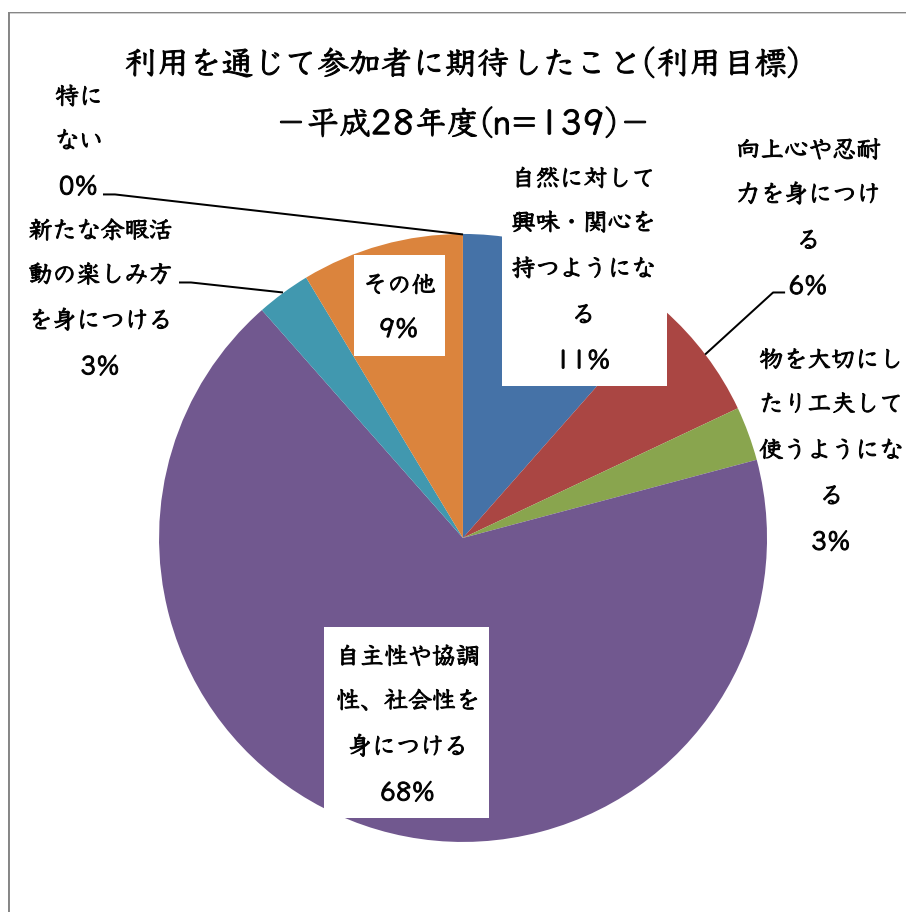


## 2. 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月24日）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照（平成30年2月26日現在）。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm)

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」（68%）が全体の約2/3を占めていて、次いで「自然に対して興味・関心を持つようになる」（11%）、「その他」（9%）が続いている。



### 「その他」の内訳

英語に親しむ。英語の楽しさ、英語はコミュニケーションツールであることを体験する。家族を離れ友だちや先生と寝食を共にし自然の中でより豊かな経験をする。競技ドッジボールの上達とチームワークの向上。教職員の資質研修。経験の拡大。参加者の交流。自分や自分の将来について考える。スケートがすべれるように。創造性を身につける。同世代社員と交流を深める。バスケットボールの技術向上。星への興味。豊かな自然の中で、友達や自然の素晴らしさを発見し、協力し合って、友情を深める。

図7 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の10年間の変化については（図8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は10年間を通じて常に最も比率の高い項目で、4年目以降は60%以上の比率で推移している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。

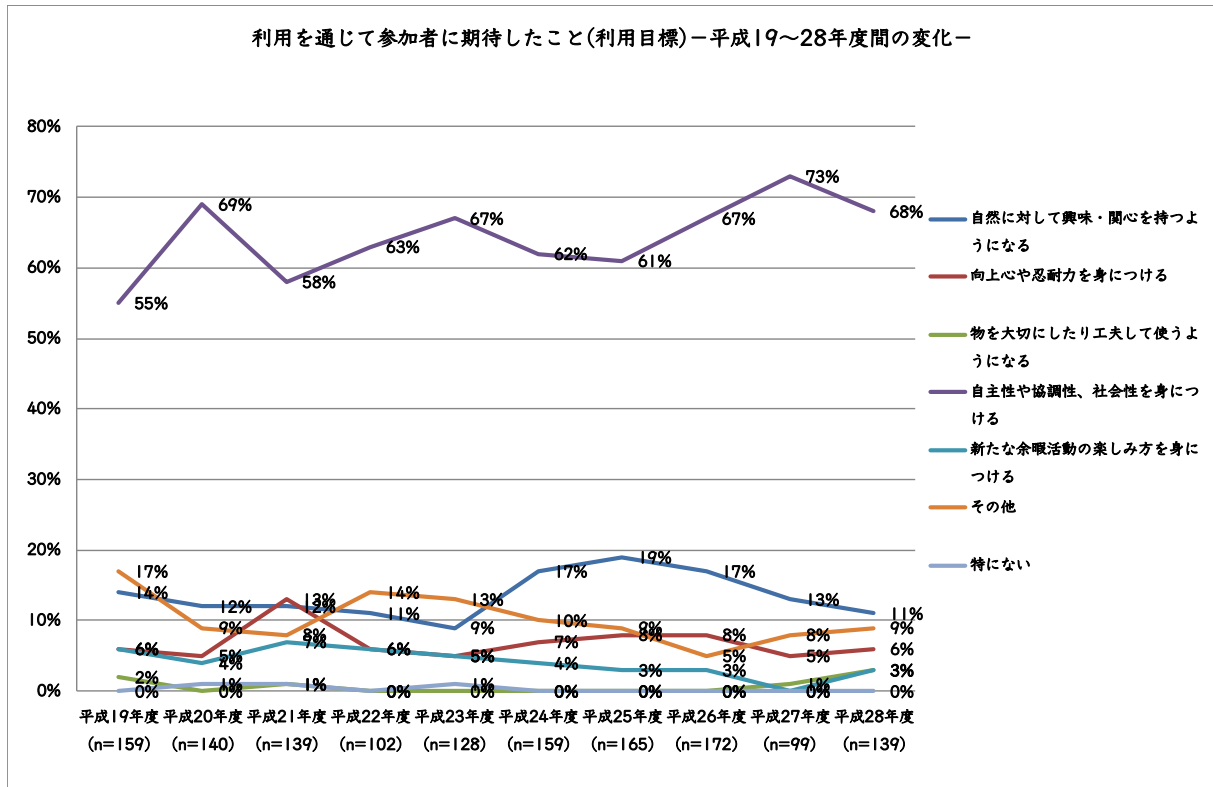


図8 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～28年度間の変化－

### 3. 利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」の4段階のいずれかで各団体自身が判断している（回答者は利用団体担当者であるが、その選定は各団体の任意による）。

その結果、図9で示されるように、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（72%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の25%で、両者が全体の9割以上を占めている。なお、「まったく期待通りできなかった」は0%である。

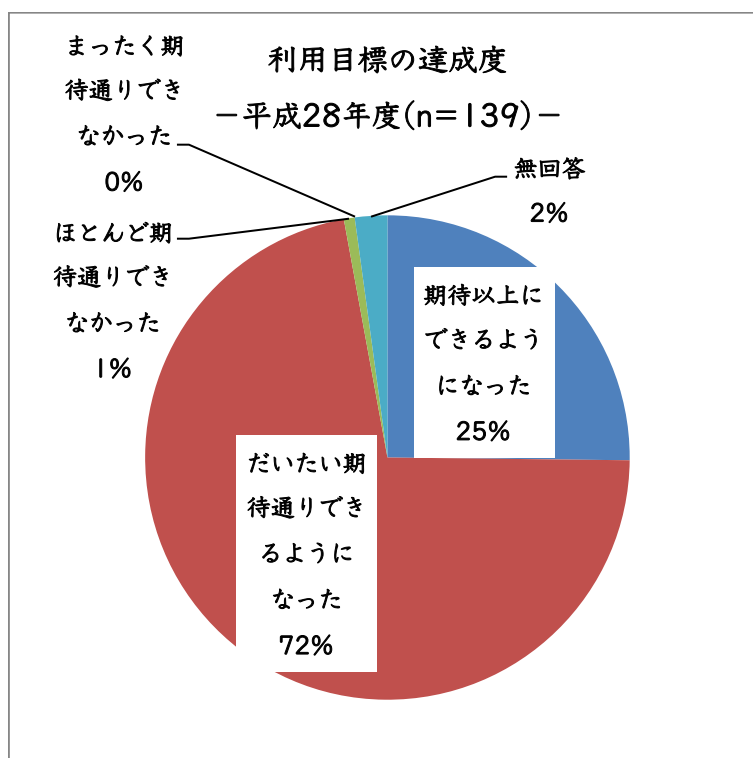


図9 利用目標の達成度

この達成度の10年間の変化については（図10）、「だいたい期待通りできるようになった」は10年間を通じて70%以上の比率である。「期待以上にできるようになった」は20%前後で推移している。

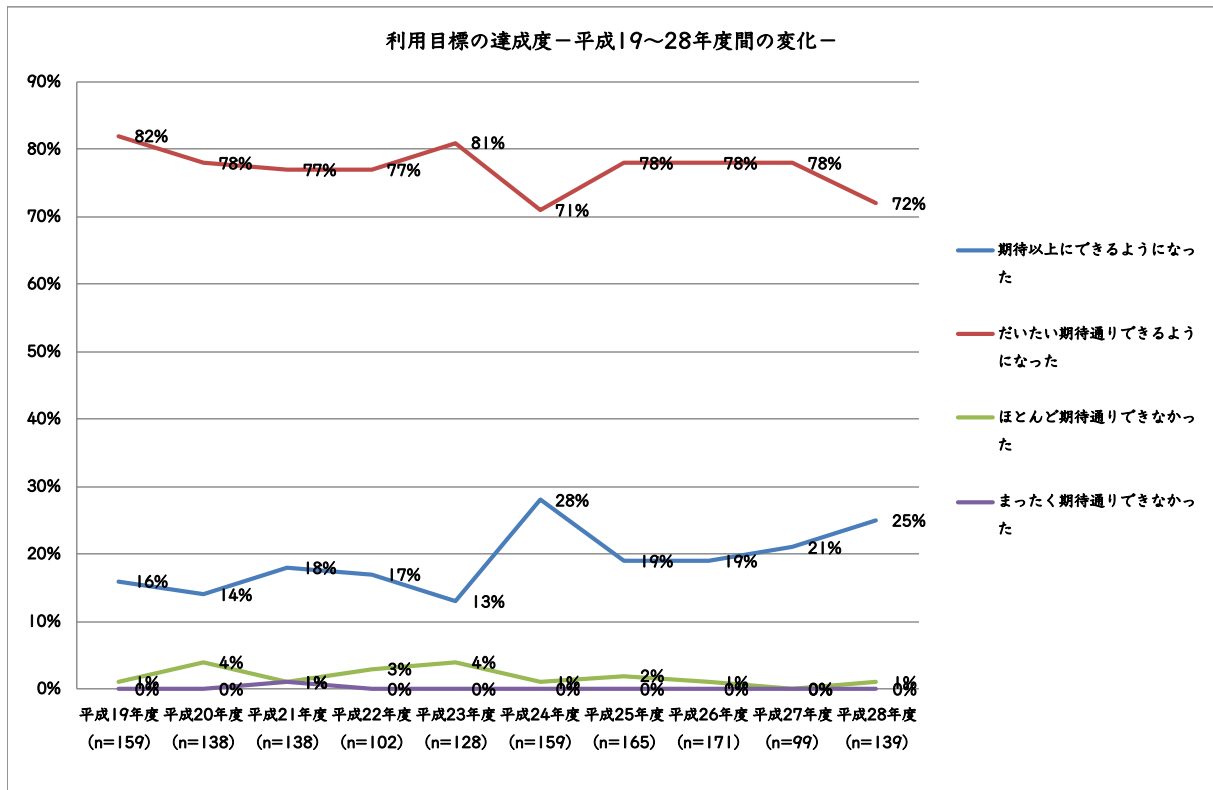
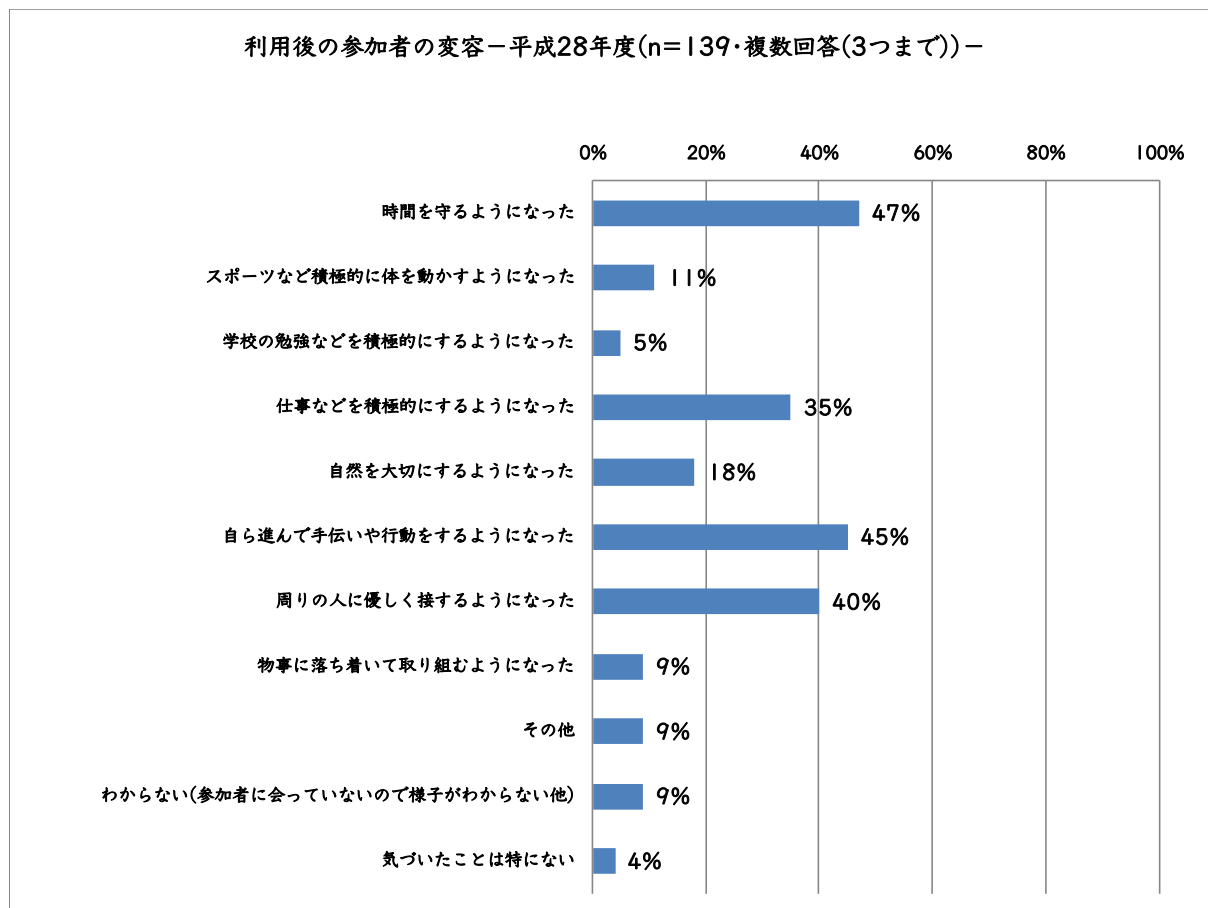


図10 利用目標の達成度－平成19～28年度間の変化－

#### 4. 利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「時間を守るようになった」（47%）が最も高く、次いで「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」（45%）、「周りの人に優しく接するようになった」（40%）の順に高くなっている（図11参照）。



##### 「その他」の内訳

あいさつがよくなるようになった(2)。一生懸命努力する力が付いてきた。感謝の気持ちをもつようになった。具体的な姿としては難しいが…宿泊したことが、自信につながったり良い思い出となったりしている。困った時に、人に聞かず、まず自分で考えて解決しようとしている。自分で判断して行動するようになった。進路選択等未来に対する積極性が感じられるようになった。少しのことでほこたれない強さが感じられる。その子らしい行動が見られるようになった(自信がついた)。自ら話しかける機会が増えた。物事に対してやりとげようとする態度。よいと思ったことをすぐ行動にうつすようになった。

図11 利用後の参加者の変容

この10年間の変化について（図12）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、4年目までは30%台、5年目以降は40%台で推移しており、10年間で13ポイント上昇している。「時間を守るようになった」の比率は、7年目以降から上昇傾向にあり、10年間で12ポイント高くなっている。「仕事などを積極的にするようになった」の比率も、7年目までは20%台、8年目以降は30%台で推移しており、10年間で12ポイント高まっている。

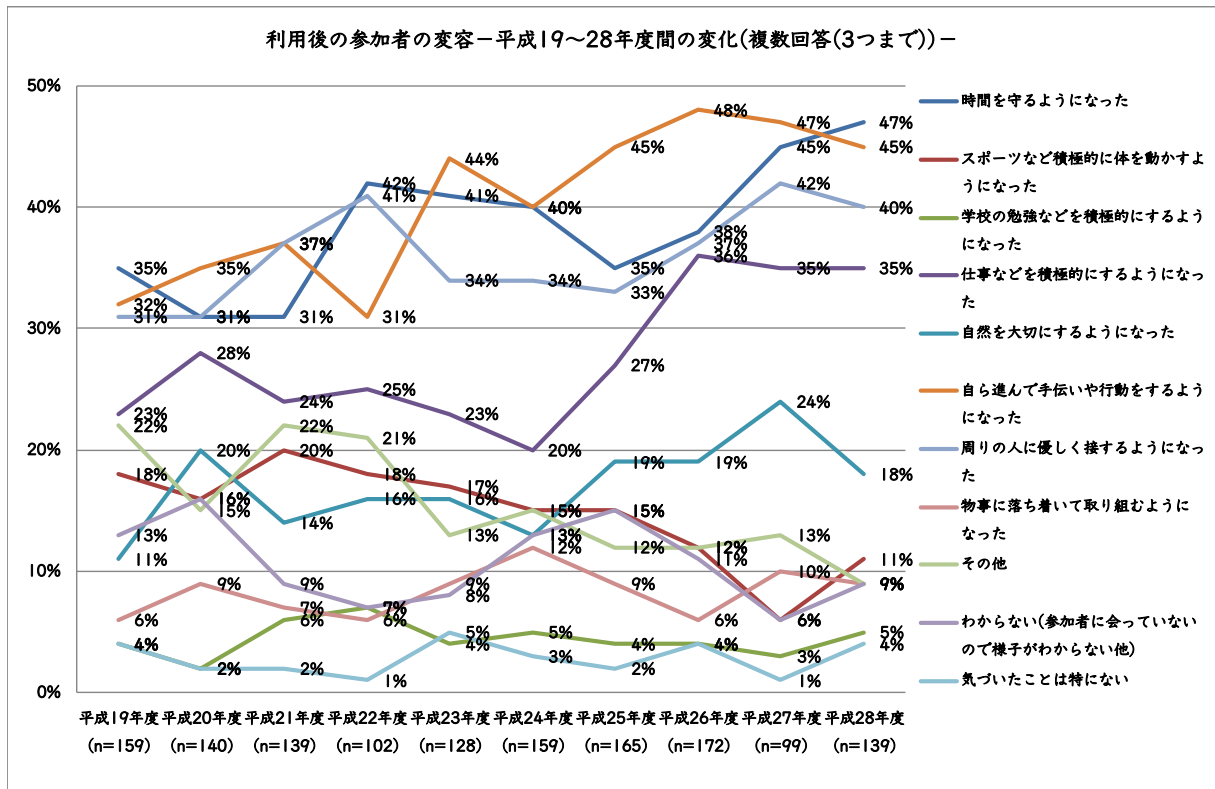
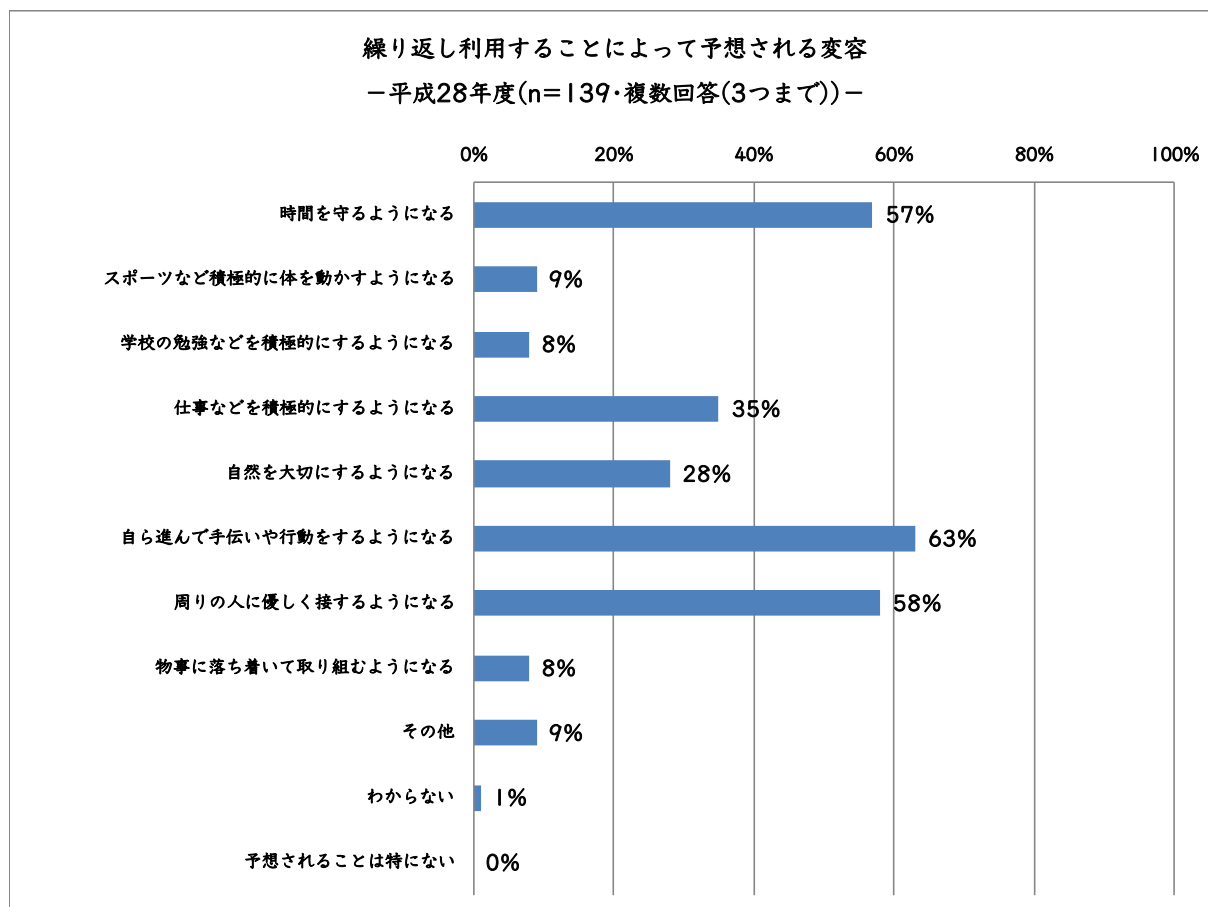


図12 利用後の参加者の変容－平成19～28年度間の変化－

## 5. 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えている（複数回答・3つまで）。その結果（図13）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の比率が最も高く（63%）、次いで「周りの人に優しく接するようになる」（58%）、「時間を守るようになる」（57%）が続いている。



### 「その他」の内訳

協調性(2)。あいさつ。競争心が芽生えるようになる。公共性の発達。公共の場でのルールやマナーを覚え、守ろうとするようになる。自己肯定感が高まる。自信をもってやりたいことに挑戦するようになる。集団行動したり仲間とコミュニケーションをとろうとするところ。自立心が高まる。スケート競技に興味を持ち、TVを見る機会がふえるようになる。相談相手ができる。日常から隔絶された環境で、じっくり考えるようになる。星への興味がわいてくる。

図13 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は2年目から加わった項目であるため、図14の通り9年間の変化を示すことになるが、それによると9年間とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。但し、2年目（調査初年度）と10年目の比率差を比較すると、「時間を守るようになる」と「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」はどちらも殆ど差が無いが、「周りの人に優しく接するようになる」は14ポイント高くなっている。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は、9年間で10ポイント低くなっている。

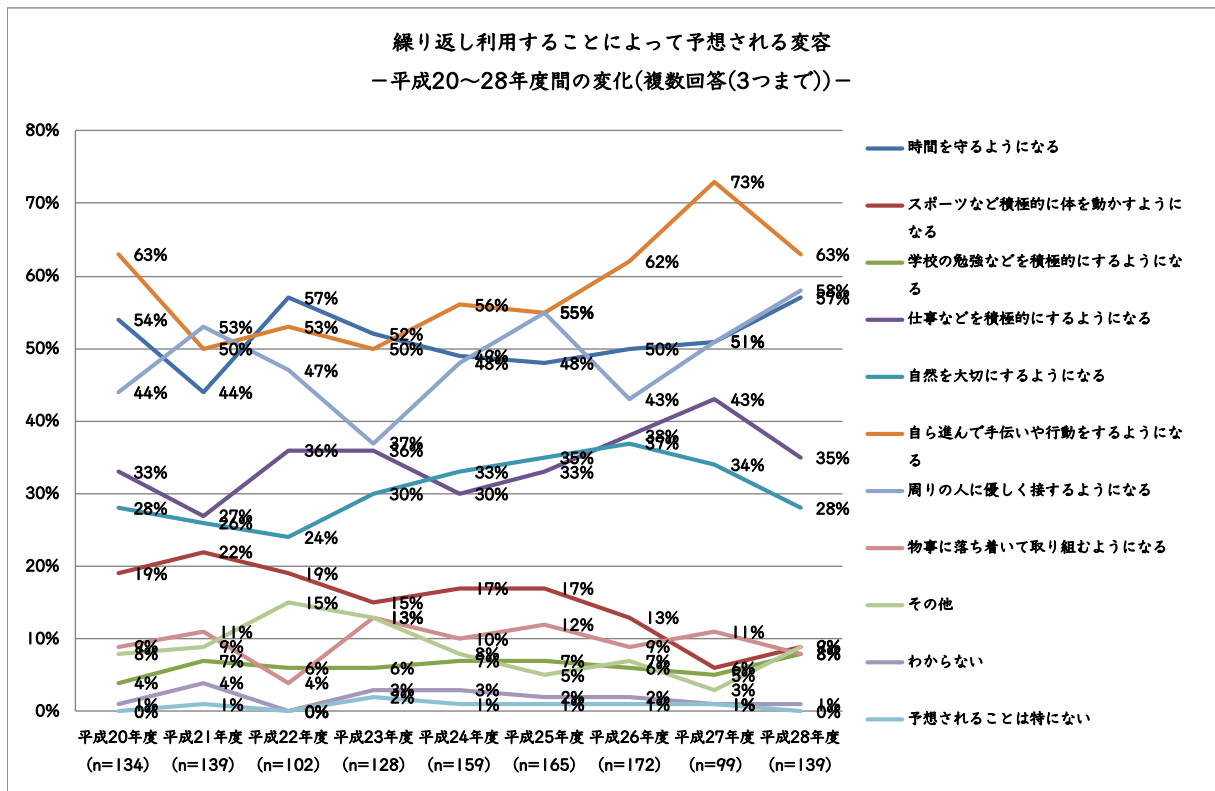


図14 繰り返し利用することによって予想される変容—平成20～28年度間の変化—



#### IV 調査結果のまとめと今後の課題

##### 1. 調査結果のまとめ

- (1) 利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、「小学校」および「7～12歳」がそれぞれ最も比率の高いカテゴリである。これらをそれぞれ経年変化で見ると、「小学校」は、調査1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9年目以降は50%台に達している。一方、「7～12歳」は、4年目までは50%前後で推移し、5年目以降は60%を超えるようになっていく。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながらも、8年目までは「1泊」が最も高い比率で、9年目以降は「2泊」が最も高くなっていく。
- (2) 利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は10年間を通じて常に最も比率の高い項目で、4年目以降は60%以上の比率で推移している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。利用目標の達成度については、「だいたい期待通りできるようになった」が10年間を通じて70%以上の比率である。
- (3) 利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、10年間で13ポイント、「時間を守るようになった」および「仕事などを積極的にするようになった」の比率は、10年間で12ポイントそれぞれ上昇している。
- (4) 繰り返し利用することによって予想される変容について、調査が行われた9年間とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が上位3項目で変わらない。但し、2年目（調査初年度）と10年目の比率差については、「時間を守るようになる」と「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」はどちらも殆ど差が無いが、「周りの人に優しく接するようになる」は14ポイント高くなっている。

##### 2. 今後の課題

本調査は回収サンプルの偏りがあるため即断はできないため、10年間通じて得られた傾向の検証を回収率を上げつつ行うことが期待される。その際、検証のポイントはとして次の2点が考えられる。

- (1) 利用目標の種類で「自主性や協調性、社会性を身につける」が10年間を通じて常に最も比率の高いのは、利用団体の特徴（小学校・7～12歳）に依るものと予想されるので、その属性別分析。
- (2) 平成28年度にあっては、利用後の参加者の変容の比率は、「時間を守るようになった」→「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」→「周りの人に優しく接するようになった」の順位である一方、繰り返し利用することによって予想される変容については、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」→「周りの人に優しく接するようになる」→「時間を守るようになる」の順位と、両者の間に若干のギャップが見られるので、その追分析。